

## 第9回 サルコペニア・フレイル学会報告

2022年10月29日,30日 立命館大学びわこ・くさつキャンパス



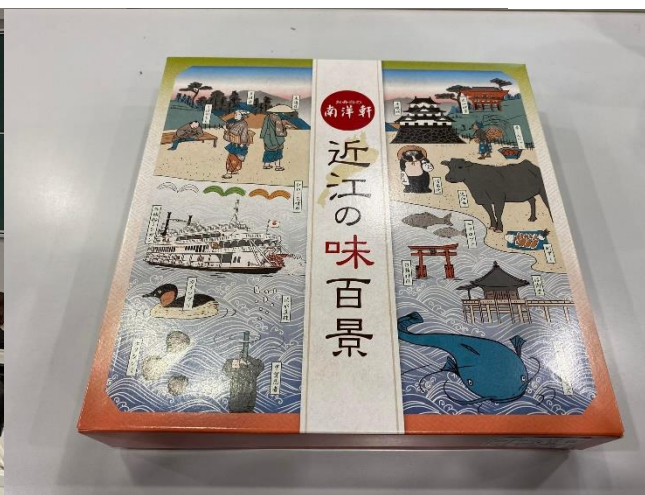
第9回日本サルコペニア・フレイル学会大会長  
立命館大学  
スポーツ健康科学部教授  
真田 樹義

この度本年度の学会大会は、およそ1年前から本格的に準備を始めましたが、コロナ禍が長引く中、行動制限等をどう考えるかが難しい状況となりました。最終的には現地とのハイブリッド開催としましたが、当日の状況からすると対面での一般発表もあってよいのではないかと感じました。以前のように、マスク着用や行動制限のない学会開催に早く戻っていただきたいとつくづく感じた次第であります。第9回大会の参加登録者数は860名で昨年度よりは少なくなりましたが、スポンサーの方々のご協力もあり、無事最後まで開催することができました。大会参加の皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

今回は現地におよそ400名の来場者があり、Webにおきましても、一時は300名を超えるご参加をいただきました。当初の予想よりは多くの方々  
に現地にお集まりいただきました。本学会のテーマは「異分野融合による新たなサルコペニア・フレイル対策」ということで、サルコペニア・フレイル分野における最前線の研究報告にとどまらず、医学、栄養学、健康科学等の学際的融合や身体、社会、心理のようなフレイル分野の融合、基礎研究と応用研究の融合など多彩なシンポジウムを実施し、大変有意義なディスカッションが行えたと思っております。最後に、大会の準備や運営にご協力を賜りました学会理事・監事の先生方、参加者の皆様、スポンサードシンポジウム、ランチョンセミナー、広告等に協賛を頂きました企業の皆様に厚く御礼を申し上げます。



運動方法の実技を交えた実践的な講義がありました。



地元の恵みを味わいながら勉強できるのも現地開催の楽しみですね。



秋高く、木々が粧う素晴らしい季節に現地で語り合う事ができました。

# 第8回アジアフレイル・サルコペニア学会報告

第8回アジアフレイル・サルコペニア学会大会を2022年10月27, 28日、愛知県名古屋市のウインクあいちで開催することができた。アジア各地のみならず、欧米(ドイツ、カナダ)からもフレイル、サルコペニア領域で顕著な研究成果をあげている研究者を招き、対面での学会が開催出来たことは大変有意義であった。コロナ禍で全く対面での国際学会が開催されてこなかったが、本学会は老年医学、老年学の分野における過去3年間におけるほぼ最初の対面での国際学会ではなかったかと思われる。実際、35名の国内外の招待演者に加え、有料登録者は約200名、オンラインのみの登録が20名であり、現地においてきわめて活発な議論が行われ、対面学会の重要性が再認識された。プログラムは6つの基調講演に加え、12のシンポジウムを企画し、活発な議論が行われた。また、62題のポスター発表もすべて対面で行った。2023年は10月27, 28日シンガポールで開催されることが決まっている。



日本サルコペニア フレイル学会 代表理事  
国立長寿医療研究センター 理事長  
荒井 秀典



Keynote speechで  
がんと心不全における  
悪液質について講  
義して頂いたStefan  
Anker先生



Oral Presentation  
Award を受賞した  
Wei-Min Chu 先生  
(左)と大会長の荒  
井先生(右)

## 書籍紹介

近年、生活習慣病による虚血性心疾患や高齢化による高血圧、弁膜症の増加などにより、心不全の患者が急増しています。心不全は、さまざまな心疾患がたどる終末像であり、高齢者が注意しなければならない心臓疾患です。特に後期高齢者では、心臓以外にも、さまざまな疾患を抱えていることが多く、フレイルやサルコペニアといった問題を抱えています。今回、ご紹介させていただく「循環器系と健康長寿・フレイル対策」はフレイル対策シリーズ各論編⑤として2022年10月に発行されました。フレイルの視点から循環器領域の診療をいかに行うか「健康長寿・フレイル対策」を第一線の執筆陣が解説されています。高齢心不全患者の病態はフレイルと密接な関連性をもち、生命予後のほかにADLやQOLの視点をもった対策が必要になってきています。内容としては病態と評価、フレイルと各疾患との関連性、循環器疾患を有するフレイルに対する介入、地域で支える取り組みなどを解説しています。循環器疾患に携わる医療者に把握していただきたい内容が満載されているオススメの一冊となっています。



医仁会武田総合病院  
疾病予防センター  
黄 啓徳

# 「サルコペニア・フレイル指導士シンポジウム」から



日本サルコペニア・  
フレイル学会認定指導士  
制度委員会 委員長  
国立長寿医療研究センター

佐竹 昭介

会員の先生方におかれましては、平素よりサルコペニア・フレイル指導士に関し、ご理解とご協力を賜りありがとうございます。

今回のニュースレターでは、第9回日本サルコペニア・フレイル学会にて開催された「学会企画シンポジウム5 サルコペニア・フレイル指導士」で頂いた意見や要望について報告します。このシンポジウムでは、川崎医科大学の杉本教授と私（佐竹）が座長を務め、指導士がどのように活躍していくか、そのためにどのような取り組みが必要か、という点について参加者と意見交換をしました。

はじめに、国立長寿医療研究センター溝神文博先生による「指導士を対象としたアンケート調査」の結果報告があり、その後参加者から意見を伺いました。以下に、頂いたご意見の一部を記載します。

## <指導士の活動強化への意見>

- ・指導士のモデルケースの紹介  
→指導士の先生に取材を行い、学会ホームページに紹介。取材や原稿作成などはプロの業者に入ってもらい委員会メンバー立ち会いのもとWEB取材としてもよいのではないか？
- ・指導士限定のSNSの作成  
→会員ページに指導士限定のページを作成し、そこで意見交換会ができるような掲示板のような機能を作るのはどうか？
- ・指導士へのフォローアップセミナー  
→症例提示を行い、その症例の対応と評価についてディスカッションできるような研修会を行うのはどうか？
- ・ホームページへの指導士の表記の仕方について検討  
→一般の方に向けたページを作成し、サルコペニア・フレイルの説明を行い、ご自身の評価や診療に関する問い合わせなどについて表記するなど一般への発信も向けて作成してもよいかもしれない。
- ・指導士の代表者による「活性化委員会」や「運営委員会」の創設  
→指導士自身が活動を活性化する組織があることが望ましいのではないかと？
- ・その他  
→指導士の地位・認知度の向上、保険点数の導入に向けた学会の対応を求める意見もありました。

頂いたご意見を踏まえ、指導士活動の活性化を推進したいと思います。引き続き会員の皆さまのご支援・ご協力をよろしく申し上げます。

【追記】2022年12月15日に開催される「渋谷フレイル予防フェア」において、指導士の派遣依頼が学会にあり、2名の指導士の方に参加をお願いいたしました。このような依頼が増えることを支援するためにも、指導士の活動をアピールしていきたいと思っております。



# 論文紹介：プレハビリテーションの利点と限界



NTT東日本関東病院  
栄養部

上島 順子

## Prehabilitation: high-quality evidence is still required

Author: Dileep N. Lobo, Pavel Skorepa, Dhanwant Gomez and Paul L. Greenhaff.

Journal: British Journal of Anaesthesia in press

doi: 10.1016/j.bja.2022.09.016

本日より紹介する論文は、手術患者におけるプレハビリテーションの利点と限界、障壁を評価したEditorial論文のご紹介です。

プレハビリテーションは、手術に対する代謝反応を弱めるために考案された、運動、栄養の最適化、心理的準備などの集学的介入です。回復期間を短縮し、合併症を減少させ、そして回復の質を高め、生活の質を向上させることを目的としています。しかしながら、プレハビリテーションの効果に関するメタアナリシスでは結果にバラつきがあり、エビデンスの強さは比較的弱いと報告されています。患者集団、介入、結果測定における異質性、およびコンプライアンスに対する幅の広さ、小規模研究などが結果のばらつきの一因です。論文中では、今後は、臨床的に適切で患者中心の明確なエンドポイントを設定した大規模な多施設共同試験を実施することで、エビデンスを強化することができるであろうとしています。そして、特に健康な患者よりもプレハビリテーションの恩恵を受ける可能性が高い、フレイル高齢者またはフレイル高リスク高齢者に対する介入研究実施の重要性について記載されていました。

高齢者では合併症がない場合でも、大手術後に20～40%の身体機能の低下の低下がみられることが報告されています。フレイル高齢者は、運動機能の低下、筋力低下、サルコペニア、バランス不良、運動処理能力の障害、認知機能の低下、体重減少、持久力とスタミナの低下による活動制限などがみられます。精神的・身体的回復力の低下は、術後の比較的軽微な合併症が、心身と社会的な健康に長期的に深刻な影響を与える可能性があります。本論文では、プレハビリテーションによる介入は多面的であるべきで、運動療法は各患者の能力に合わせて調整する必要があるとされています。また、運動および栄養の介入は、術後のリハビリテーション期間中にも実施されるべきとされています。そして、プレハビリテーションの長期的な効果も今後の研究では調査されるべきです。

手術患者の高齢化が進む日本では、これら集団に対する積極的な集学的介入のエビデンスが今後必要です。



熊本リハビリテーション病院  
リハビリテーション部

長野 文彦

## 第9回ACFS

October 26 (pre-conference) and 27-28 (conference),  
2023 Singapore

The 9th ACFS (ASIAN CONFERENCE for FRAILTY AND SARCOPENIA)は、シンガポールにて開催予定です。プレカンファレンスは2023年10月26日、カンファレンスは同年10月27～28日に行われます。詳細な情報はまだ公開されていませんが、ぜひ参加をご検討ください。

## 第13回ICFSR

March 22-24, 2023 Toulouse, France

ICFSR (International Conference on Frailty and Sarcopenia Research)は、フレイルやサルコペニアを対象とした質の高い臨床試験を推進するために、高齢者の健康的な老化のための治療法、障害や介護の予防法について加速的に発見する目的で設立されました。

2023年3月22-24日には、フランス(Toulouse)のHôtel Dieu Saint JacquesにてThe 13th ICFSRが開催されます。Keynotes Speakersとして、Leocadio Rodríguez Mañas 先生、Ann Belien 先生、Mikel Izquierdo 先生、John Beard 先生、Emanuele Marzetti 先生が登壇されます。フレイルに関する国際的な展望、推奨されるエクササイズやライフスタイルについて、そしてサルコペニアに対する課題や医薬品開発の現状など、多岐に渡るテーマでディスカッションされる予定です。詳細についてはホームページをご参照ください。ぜひ参加をご検討ください。

(ホームページ: <https://www.frailty-sarcopenia.com/index.php>)

## IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023

June 12- 15, 2023, Yokohama, Japan

IAGG (The International Association of Gerontology and Geriatrics) Asia/Oceania Regional Congress 2023 は横浜で開催されます。大会テーマは、For Enhanced Wellbeing in Later Life through Innovation and Wisdom Sharingです。国内で開催される貴重な国際学会です。演題登録は2022年12月26日までです。是非、ご参加をご検討下さい。

## 第16回SCWD

17-19 June 2023 in Stockholm, Sweden

The 16th international Conference of the Society on Cachexia, Sarcopenia & Muscle Wastingは6月17日から19日にスウェーデンのストックホルムで行われます。

プログラムは近日公開予定となっています